

夜須高原スマイルライフキャンプ

1 趣 旨

ひとり親家庭の生活の向上や安心に寄与するため、保護者同士で子育てに関する不安や悩みを共有し、互いに学び合い、ネットワークづくりを行う。また、様々な自然体験活動・生活体験活動を通して、親子間や子ども同士のコミュニケーションを深め、子どもの自立心や協調性、自己肯定感、チャレンジ精神等の向上を図る。

2 主 催

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立夜須高原青少年自然の家

3 連携機関

北九州母子寡婦福祉会（ルックひまわり）

4 期 日

平成30年10月13日（土）～10月14日（日）〈1泊2日〉

5 会 場

国立夜須高原青少年自然の家 飯塚市サンビレッジ茜（人工芝スキー場）

6 対 象

北九州母子寡婦福祉会（ルックひまわり）会員 ＊親子で参加（50名）

7 参加者 31名

○参加人数：11家族24名 ○北九州母子寡婦福祉会2名 ○学生ボランティア：5名

8 日 程

○10月13日（土）

（午前）出会いのつどい、星と夜景の丘ハイキング

（午後）思い出の竹ランタンづくり、林間ボブスレー、テント設営、竹ランタン燈火

○10月14日（日）

（午前）ホットドッグづくり、人工芝スキー体験

（午後）ふりかえり～感想文（母子寡婦福祉会）・アンケート（機構本部）、別れのつどい

9 活動の実際



【星と夜景の丘ハイキング】



【竹ランタンづくり】



【テント設営】



【テント撤収】



【竹ランタン燈火】



【ホットドッグづくり（朝食）】



【後片付け・清掃】



【人工芝スキー体験】

10 アンケートから

<保護者>

- 学生ボランティアの方とお話しできたのも良かったです。
- 普段体験出来ない事を学んだり、楽しい活動を通して子供の成長を見ることが出来たので良かったです。
- 今回は親と子と別々に行動をした事で、子供同士、親同士がいつもより会話が出来ました。ボランティアの学生さんもみんなよくしてくれて感謝です。ありがとうございました。

<児童>

- みんなと協力することで、とてもスムーズにできることが、テントを立てるとき、かたづけるときに改めて分かりました。
- ボブスレーがたのしかったです。

<北九州母子寡婦福祉会ルックひまわり会報用原稿>

☆小倉地区在住参加者（子ども）

一泊二日、竹ランタンを作ったり、ホットドッグを作ったり、ボブスレーやスキーなどすごく楽しかったです。竹ランタンは竹を切ったり、ホットドッグは牛乳パックで作ったりするのははじめての経験でした。ボブスレーはジェットコースターみたいで楽しかったし、スキーははじめてでコントロールがむずかしかつたけど楽しかったです。テントをはるのもねぶくろでねるのも初めてで、いい経験になりました。友だちもできたのでよかったです。またこういう機会があったらぜひ行ってみたいです。

☆若松区在住参加者（保護者）

2回目のキャンプ参加でした。去年が楽しくて今回も参加しましたが、去年とは違ったプログラムで、初めてのテント設営や寝ぶくろで寝たり等の体験はすごく新鮮でした。竹ランタン作りも普段ノコギリやナタを使うことがないので、私にとっても子どもにとっても良い体験となりました。また今回、親と子のグループに分かれて別行動をしたのも良かったです。密接している普段の距離が、良い意味で離れて、親子それぞれ自立や関係づくりがより深まった気がします。とても楽しい2日間、ありがとうございました。

1.1 成果

- 各活動プログラムにおけるねらいの明確化を行い、それを意識した子ども達や保護者への声かけをした結果、それぞれの活動に対する意欲づけや行動化が図られた。また、学生ボランティアと事前打合せや就寝前のふりかえりを行い、お互いの思いを共有することで、共通認識の下で参加家族と接することができた。
- 担当職員が母子寡婦福祉会の事務局に出向き、事前の打合せを行うことで企画や準備を円滑に進めることができた。
- 子どもの活動と保護者の活動を分けて行うプログラムを実施した結果、子どもの自立を促す機会になったり、保護者が子どもの姿を客観的に見ることになったりすることができた。（アンケートの自由記述より）
- 野外ではなく体育館でのテント泊・シュラフ体験、手軽にできる野外炊飯（ホットドッグ）などのキャンプ疑似体験を行うことにより、母子家庭ではなかなかできないキャンプを安心して体験してもらう機会になった（アンケートの自由記述より）
- 子どもの就寝後、「保護者会」を初めて実施したことにより、保護者同士の情報交換や子育ての悩み相談が行え、保護者同士のネットワークや母子寡婦福祉会事務局との関係づくりに繋がった。

1.2 課題

- 開催日の設定（台風シーズンであり寒暖の差が大きくなる時季でもあるため、連携先である母子寡婦福祉会とも十分な協議が必要である。）
- 母子寡婦福祉会との十分な意思疎通（母子家庭の方々が、キャンプ事業においてどのような願いがあるのか、どういった活動を求めているのかを、十分な情報交換の上で活動プログラムづくりをしていく必要がある。）
- 準備や移動も含め、プログラムにゆとりのある時間配分をするように努める。
- 子どもへの気配りや他家族との交流面において不安を抱いている保護者も多いことから、支援スタッフ（ボランティア）の確保だけでなく事前の綿密な打合せが重要である。（大学との連携やボランティアとの事前研修等の実施）